

塔からきざはしへ

—The Tower period⁽¹⁾を中心に—

木村淳子

〔I〕

1920年3月、イエイツはアメリカ講演旅行の途中、オレゴン州ポートランドに立ち寄った。たまたま講演を聴きに来ていた、日本人留学生、佐藤⁽²⁾醇造氏はイエイツに一振りの日本刀を贈った。それは備前長船の刀工、三代元重の作になるもので、花の縫い取りのある、古い絹布に包まれていた。そして五百年前に作られた時と同じように、一点のくもりもなく澄明であった。以来、元重の刀はイエイツ家の、いわば家宝として継がれている。⁽³⁾

イエイツのこの旅行は、彼が1917年6月に35ポンドを支払うことによつて、ようやく自分のものにすることのできた、バリリイの古塔の尾根を修復するためになされたものであった、といわれている。⁽⁴⁾ イエイツにとっては、永生、永遠智への道であり、シンボルでもあった塔を完全にするためになされた旅行の途中、世界の新しい国アメリカで、五百年を経て、なお完全な美しさを保っている刀を贈られた、ということには、なにか象徴的な味わいがある。しかも剣は、ケルト族にとっては魔よけの力を持つものであり、智力の像のシンボルでもあった。⁽⁵⁾ “A Dialogue of Self and Soul”の中にはこの剣が、“Sato's sword”としてうたわれているのであるが、この詩はイエイツの“The Tower period”の頂点をなすものと考えられる。詩集 *The Tower* に於てイエイツの求めたものが“Sato's sword”によつて一つの解決、あるいは、ゴールを見出したと考えられるのは興味深い。

The Tower は、1928年に出版された。すでに十代から詩作をはじめていたイエイツは、久しい以前から相当の評価をうけていた大詩人であり

1923年にはノーベル文学賞を授与されていた。しかし、イエイツを真に当代の大詩人とし、また彼に今世紀最大の英詩人という栄誉を与えたのは、*The Tower* であり、1939年1月に没するまでの十年余りの歳月であった。T. S. エリオットが、1940年にダブリンのアベイ座で行った講演の中で述べている言葉はすでに有名である。すなわち、

—the poetry of the young Yeats hardly existed for me until after my enthusiasm had been won by the poetry of the older Yeats; and by that time—I mean, from 1919 on—my own course of evolution was already determined. Hence, I find myself regarding him, from one point of view, as a contemporary and not a predecessor; and from another point of view I can share the feelings of younger men, who came to know and admire him by that work from 1919 on, which was produced while they were⁽⁶⁾ adolescent.

イエイツのいう1919年とは、*The Wild Swans at Coole* の出版された年であり、*The Tower* に著しい傾向、すなわち、これまでのケルト的な伝説の世界、あるいはその後に来る象徴の世界への憧れからの脱皮がきざしはじめた時期であった。1919年以前の作品においてイエイツが求めているのは、ケルト的なペイガニズムの世界であり、シンボリズムの世界であった。ともに現実を遠く離れた世界への憧れ、という点において一致をみるであろう。ケルト的な、夢想的あるいは現実逃避的な態度を持っていた時期であった。この時期の詩は、多く美しい詩語にみちた、華麗なものであったが、エリオットのいわゆる、⁽⁷⁾“anthology piece” にすぎぬものであった。しがじながら、1919年の *The Wild Swans at Coole* 以後、イエイツは、*“the poet who, out of intense and personal experience,*

is able to express a general truth ; retaining all the particularity of his experience, to make of it a general symbol.”⁽⁸⁾ となつていったのである。この時期が、実際上でも、内的な世界においても、イエイツが塔への関心を持ちはじめたのと時期を同じくするのは興味深い。*The Wild Swans at Coole* に収められている二つの詩，“Ego Dominus Tuus”⁽⁹⁾ と，“The Phases of the Moon”⁽¹⁰⁾ には、すでに塔がうたわれているが、まだ塔は遠くから一つの象徴として眺められているにすぎない。塔が、もっとはっきりとした実体をもつてうたわれるようになるのは、バリリーの塔が現実のものとなつたからである。

I have walked and prayed for this young child an hour and
heard the sea-wind scream upon the tower.⁽¹¹⁾

イエイツが、クールにあるグレゴリー夫人の荘園に近いバリリーにある古塔に心を寄せ、それを買い取りたく思うようになったのは、彼の結婚の数年前からであった。クール荘園はイエイツのよく訪れた処であり、*The Wild Swans at Coole* の中の同じ題名の詩，“The Wild Swans at Coole”をはじめ，“Coole Park, 1929”⁽¹²⁾，“Coole Park and Ballylee, 1931”⁽¹³⁾ などの詩によって知られるところである。さて、クールから程遠からぬバリリーに古びた塔があった。そこは、盲目のケルト詩人ラフタリイによつてうたわれている、絶世の美少女、メアリー・ハインズが、かつて住んだといわれる処でもあった。塔がイエイツの関心を呼びおこしたのは、この美少女と、彼女にまつわる物語のためであり、メアリー・ハインズがイエイツの興味を引いたのは、その姿のうちにモード・ゴーンとの類似を見出したからであった。モードこそはイエイツの永遠の女性であり彼女への思慕の念は彼の生涯の長い期間にわたって消えることのなかつたものであった。メアリーのうちにモードの姿を見るイエイツは、モードのうえに

トロイのヘレンを重ねる。こうして読者は、イエイツの詩集の思いがけぬところにモードの姿をのぞき見ることになる。*Responsibilities* の中に収められている“*When Helen Lived*”⁽¹⁴⁾という短詩も、そのような表われの一つであるといわれる。⁽¹⁵⁾“*The Tower*”の中では、イエイツはメアライ・ハインズについて次のようにうたっている。

And praised the colour of her face,
And had the greater joy in praising her,
Remembering that, if walked she there,
Farmers jostled at the fair
So great a glory did the song confer.
And certain men, being maddened by those rymes,
Or else by toasting her a score of times,
Rose from the table and declared it right
To test their fancy by their right ;
But they mistook the brightness of the moon
For the prosaic light of day——
Music had driven their wits astray——
And one was drowned in the great hog of Cloone.
Strange, but the man who made the song was blind ;
Yet, now I have considered it, I find
That nothing strange, the tragedy began
With Homer that was a blind man,
And Helen has all living hearts betrayed.⁽¹⁶⁾

田舎娘メアライは、この詩の中でもイエイツにヘレンを想起させているが、それは、あのメアライ、モード、ヘレンとつながる線の、潜在的では

あろうが、部分的な顕現であると考えられることができるように思われる。

イエイツの塔への憧れは、モードに対する憧憬の念に一端を発するものではあったが、イエイツはそれを、より高い次元への憧れへと昇華させていった。イエイツは塔によって実存の追求への一つの足がかりと、到達点を見出していったのであった。1917年になって夢が実現したとき、イエイツの詩風は明白な変化を遂げて行った。すなわち、塔の上から人間の生活の実態を眺めやったときに、イエイツの目は、夢幻の世界をさまようのではなくて、現実をまともに見つめねばならなくなった。*The Tower* は、イエイツのこのような視点を示す作品であり、その次の詩集、*The Winding Stair and Other Poems* では、より一そう大きな広がりを持つ内的世界への到達がある。

The poetry of *The Tower* period is rich because of the fullness of Yeats' life, because his style was reaching maturity at the same time as his life. The poems of the twenties therefore deal with many of his interests: politics, philosophy, friendship and love; but they are all "Tower" poems, the work of a personality and a public figure who is writing for an audience.⁽¹⁷⁾

あらゆる方面に幅広い活動を見せた "The Tower period" のイエイツの姿と、"The Winding Stair" を登りながらイエイツは何を見出そうと努力していたのか、"Sato's sword" は何をもたらしたのかを探ってみたい。

〔Ⅱ〕

イエイツが塔を買い取った1917年は、結婚の年でもあった。モード・ゴーンとのロマンスは実らぬままに終わった。モードへの求婚、モードの拒絶、すでに離婚していたモードの夫の死、モードの養女イズルトへの求婚など、

さまざまの事件のあとで、イエイツは若いジョージ・ハイド・リーズと結婚した。結婚の後もイエイツには傷心の日々が続いたのであったが、やがて19年には娘、アン・バトラー・イエイツが誕生、21年には、長男、マイケル・イエイツがうまれた、養なわねばならぬ家族をかかえて、イエイツはもはや己れの想いの中に浸っていることはできなくなった。「満たされざる恋に身を委ねたまま、その気晴らしを公的活動に見出していた」⁽¹⁸⁾時期はもうすぎた。彼の目は必然的に地上に向けられねばならなかった。

May she be granted beauty and yet not
Beauty to make a stranger's eye distraught,
Or hers before a looking-glass,⁽¹⁹⁾

Bid a strong ghost stand at the head
That my Michael may sleep sound,
Nor cry, nor turn in the bed
Till his morning meal come round;
And may departing twilight keep
All dread afar till morning's back,
That his mother may not lack
Her fill of sleep.⁽²⁰⁾

これ等は、まだ幼い我が子への愛、その母親に対する心づかいが滲み出ている詩行である。

1920年にはアメリカ講演旅行が計画された。それは先にも述べたとおり、塔を修復するためになされたものであった。22年には元老院議員に推され、ダブリンのトリニティ・カレッジからは文学博士の称号を授けられた。1923年にはノーベル文学賞を授与されている。“*The Tower period*”の詩人

としてのイエイツは、これまでのどの時期のイエイツよりも現実的であり、実人生に深く根をおろした感がある。それはこの時期が、他のどの時期よりも人間として充実した活動の時期であり、しかもその範囲が、人間生活のあらゆる方面に及んでいたからに他ならなかった。

1916年の内乱につづいて、1919年にはまたもやアイルランドに内紛が起った。国の中の荒廃はすさまじいものがあった。この時には、イエイツはバリリイに滞在中であった。バリリイから外に通じる道路は破壊されて、イエイツはやむを得ず塔にこもっていたのであったが、かなたには銃声のとどろき、戦さの叫びは古塔の上までも聞えて来た。塔はこの時、実際的な意味においても、また比喩的にも、イエイツの避難所となっていた。

I climb to the tower-top and lean upon broken stone,
 A mist that is like blown snow is sweeping over all,
 Valley, river, and elms, under the light of a moon
 That seems unlike itself, that seems unchangeable,⁽²¹⁾
 A glittering sword out of the east.

塔には静けさがあった。かなたの空には、人の世のめまぐるしさに較べては、変らぬもののように見える、刀のように細くしなった月がある、月は東洋のあの静けさをたたえた刀のイメージをイエイツの心に浮かべたかもしれない。その月の下では争乱がつづいている。

“Vengeance upon the murderers” the cry goes up,
 “Vengeance for Jacques Molay.”⁽²²⁾

戦さの叫びが塔の上のイエイツを現実にもどす。アイルランドは、この塔に接続する廃屋にも似ていた。壁にはひびが入り、屋根は朽ち、かつ

て住んでいた椋鳥たちは巣を見捨ててどこかへ行ってしまっていた。ある日イエイツはこの廃屋の壁の裂け目に蜜蜂が巣を作っているのを見つけた。蜂は平和と繁栄のシンボルである。争乱によって荒された祖国、アイルランドに平和がもどるのはいつであろうか。イエイツは蜜蜂に呼びかける。

.....honey-bees,

Come build in the empty house of stare.

We had fed the heart on fantasies,

The heart's grown brutal from the fare ;

More substance in our enmities

Than in our love ; O honey-bees,

Come build in the empty house of the stare. ⁽²³⁾

塔の上から広く世の中を見渡し、そこに様々の現実の問題を見出したとき、イエイツは己れの世界にのみ浸っていることはできなくなつた。養なわねばならぬ家族をかかえて、彼の足は地についたのであつたらうし、目は地上に注がれることになつたのであろう。

Now days are dragon-ridden, the nightmare

Rides upon sleep : a drunken solidary

Can leave the mother, murdered at her door,

To crawl in her own blood, and go scot-free ; ⁽²⁴⁾

イエイツは公的な活動の世界に飛び込んで行った。足は地を踏まえ、目は地に注がれてはいたが、なお、その血の中には、“I will arise and go now, and go to Innisfree, / And a small cabin built there, of cray

and wattles made”⁽²⁵⁾ とうたった頃のロマンチックな情熱が脈々と流れていたのではなからうか。イエイツは首都ダブリンを文化の一大中心地とすることを望んでいたし、また政治的には、新教徒が支配する一種の貴族共和制を望んでいた。「彼は「地主階級」が残り、新教徒優勢派が、その富の故にそのウイトと風習を維持し一つの支配層を形成することを望んでいた。彼は詩人を保護する地方豪族と、それに帽子に手をやってお辞儀する百姓の姿を描いていた。彼は政治に関してロマンチックな少年にすぎな⁽²⁶⁾かった。」しかし現実にあるのはローマンカトリック教を奉ずる農民の民主政体であり、地主階級は繁栄するどころか、かえって暴動によって没落して行った。周囲の事情はイエイツの望むところとはかけ離れて動いて行った。1925年にイエイツが議会において、離婚に関する法案のために演説したとき、その論旨が離婚を正当なものとして擁護しようとする方向に傾いていたために、大方の意見と対立し、彼の立場はますます孤立してしまった。イエイツの元老院との結びつき、世間一般との結びつきは、はなはだおもしろくないものとなってしまった。

Much did I rage when young,
 Being by the world oppressed,
 But now with flattering tongue
 It speeds the parting guest.⁽²⁷⁾

理想は、はるかかなた、手のとどかぬところにあった。現実の人間たちはイエイツの望むようなものではなかった。

Come let us mock at the great
 That had such burdens on the mind
 And toiled so hard and late

To leave some monument behind.

Nor thought of the levelling wind,

Come let us mock at the wise

With all those calenders whereon

They fixed old aching eyes,

They never saw how seasons run,

And now but gape at the sun.

Come let us mock at the good

That fancied goodness might be gay.

And sick of solitude

Might proclaim a holiday

Wind shrieked—and where are they?

Mock mockers after that

That would not lift a hand maybe

To help good, wise or great

To bar that foul storm out, for we

Traffic in mockery.

現実の世界の中でイエイツが見出したのは、己れをも含めて、人間達の浅ましきであり、愚さであり、そうした人間達に対する嘲りの念でもあったらうか。読者はこの時期の作品の随所に己れを“an old srarecrow”と嘲ける詩人の姿を見る。それは、己れの理想から隔てられて、散文的な生活に身を浸している詩人の悩み多い姿である。

〔Ⅲ〕

塔ののぞみは憧憬の的であったモード・ゴーンへの想いに端を発した。塔が現実に己れのものとなったとき、イエイツの悲劇的なロマンスは永遠に終ることとなった。しかしながら、彼のモードへの想い、憧れは依然として彼の身うちにあって消えることがなかった。モードの影は彼の作品の思いがけぬところにかかって居る。イエイツの公人としての生活ぶりの一端をのぞかせる“Among School Children”の中で、彼は昔の恋人に対する想いを燃えあがらせる。学校を視察して、少女達の勉強ぶりを見ながらイエイツは幼い頃のモードを想像する。いつかモードが語った少女の日の悲しみ多い出来事が思い出され、それは目の前の少女達の姿に重なって、イエイツの心はモードに対する同情の念であふれ、それは現在のモードに対する想いとなり、やがてすべての女性に対する同情にかわる。目の前の少女達の若々しい顔は、「60才ののほほえめる公人」イエイツには、歴史的な重みをさえ感じさせる。

I dream of a Ledaean body, bent
 Above a sinking fire, a tale that she
 Told of a harsh reproof, or trivial event
 That changed some childish day to tragedy—
 Told, and it seemed that our two natures blent
 Into the yolk and white of the one shell.⁽²⁹⁾

イエイツはモードの幼き日を偲び、かつてモードが語ってくれた幼い頃の悲しみに満ちた思い出話を想起して、その胸は同情の念で一ぱいになり、それはさらに現在のモードに対する想いに変り、やがて己れをかえりみることになる。少女達はこの老いた公人の突然の訪れを驚きながら見ていることであろう。

Better to smile on all that smile, and show
There is a comfortable kind of old scarecrow. ⁽³⁰⁾

イエイツは老いた己れの姿から、人間の一生を思い、宇宙を形成する不思議について古えのギリシャの哲人達の語った言葉を思いめぐらし、やがて人間存在に関して、自分自身の解決へせまろうとする。人間の存在は、目に見える部分と、見えない部分、即ち、精神と肉体の両方が一如なるところにあるのではないか。

Labour is blossoming or dancing where
The body is not bruised to pleasure soul,
Nor beauty born out of its own despair,
Nor blear-eyed wisdom out of midnight oil.
O chestnut-tree, great-rooted blossomer,
Are you the leaf, the blossom or the bole!
O body swayed to music, O brightening glance,
How can we know the dancer from the dance! ⁽³¹⁾

ここに至って、イエイツの恋の想いは、宇宙人類の存在の意義の追求へと高まっていく。しかも、エドモンド・ウイルソンが、『アクセルの城』の中で述べているように、イエイツは以前よりも日常的な態度で書きながら、しかも大抒情詩人たる面目をあきらかにしている。⁽³²⁾ 塔に依るとき、イエイツははげしかった思慕の念をさえ、もっと余裕のあるものと変えてしまうのである。“The Wild Swans at Coole”の中でみせている、身構えた恋の嘆きはもはや見当らないのである。しかもなお、得ることのできなかった恋の想いは、最後までイエイツの心の中に影を落している。彼は敢えてそれをかくそうともしない。人生も大半を生き抜いた詩人には、は

げしかつた恋の想いをさえも、愛しむことのできる程に、人生を眺めるゆとりができてきたのであろう。

We were the last romantics——chose for theme

(33)
Traditional sanctity and loveliness;

浪漫主義最後の残徒、イエイツは、得がてぬ愛ゆえに“Traditional sanctity and loveliness”を人生に追い求めたのであった。女人に対する憧れは、時を経て、人生のすべてを味わいつくしたあとにも、イエイツの心に、あらゆる事象に対する憧れを残していたのであった。

[IV]

1925年の議会での演説によって、イエイツの立場は、ますます周囲とはかけ離れたものとなっていった。このとき、詩人イエイツが求めたのは、己れの存在を全きものとするところのことができるような世界であった。ケルト的な心情に生きる者は、この世に樂園を求める。初期及び中期のイエイツが求めていたのは、ケルト伝説の世界であり、またそこに見出すことのできる象徴の世界であった。

ケルトの伝説の中で語られる楽土、ティール・ナ・ヌォーグは、肉体を持つ人間の行きつくことのできる、永遠の青春の国である。そこに至った人間は、現世の人間と同じように肉体を持って生きることができるが、この世のすべての悲しみ、苦しみからは全く解放されている。霧深い、おぼろな国に住むケルト族には、夢と現実の区別は定かではなく、夢幻の世界ティール・ナ・ヌォーグ⁽³⁴⁾はこの世界のうちに見出されるべきものなのである。そして、現実の世界の苦しみが大きければ大きいほど、楽土を希求する心は強くなる。イエイツが、そしてイエイツによって当時のアイルランドの民衆が、伝説の世界に憧れたのは、当時のアイルランド国内の不安定

な状態によるものとも考えることもできようし、また一つには、キリスト教的な永生思想に対するケルト的反動と考えることもできるであろう。即ち、永遠の福樂を得ることのできるのはこの世ではなくて、肉を空しくすることによって入ることのできる彼岸の世界に於てであり、それ故に、この世はいわば彼岸に入るための門口であるとするキリスト教的な永生の思想は、ケルト的心情を持つものには容易に受け入れることのできぬものである。イエイツがケルトの伝説を復活させたとき、民衆は忘れかけていた魂の世界の回復をよろこび迎えたことであつた。

さて、現実のアイランドは荒廢しきつていた。ティール・ナ・ヌォーグは、この国の中には見出すべくもなかつた。イエイツのうちにあるケルト的心情は、この国を離れた遙かな土地に理想郷を見出さなければならなかつた。

イエイツがビザンチウムの芸術にふれる機会を得たのは、グレゴリー夫人に同伴した、1907年のイタリア旅行中であつた。この時には取り上げるべき何の影響をも与えられはしなかつたようである。その後の彼の歴史の研究によって、イエイツは次第にビザンチウムと、その芸術に惹かれて行つた。イエイツはビザンチウム芸術に関する様々の書物を読み、また当時、多くの芸術家、文人達に影響を与えたT. E. ヒュームの哲学等によって、さらに深い関心を寄せることになつて行つた。しかし、あのように深い傾倒は、イエイツのうちにあるケルト的な心情によるものであつたらう。キリスト教的な倫理感の支配する世界のうちでは、ケルト的心情の持ち主はくつろぎを見出すことはできなかつた。ビザンチウムのモザイク芸術への傾倒、そして東洋的な禅学思想への関心は、あまりにも生々しく肉体の崩壞を示している十字架の像のあらわすすべての思想に対する反撥でもあつた。

「老いの身の郷にはあらざる国」を離れて、イエイツはビザンチウムへと船出する。若人達が腕くみかわして歌いさざめく国、己れの祖国では、永遠の智を求める精神は、もはやその存在の場を見出すことができない。精神はないがしろにされてただ“sensual”な情熱のみが、すべてを支配している。肉体が“a tattered coat upon a stick”となり下ってしまったとき、この限りある生の国では、“a paltry thing”以外の何物でもなくなってしまう。己れの存在には何らの意味も与えることのできない場所となってしまう。そこでイエイツは、

And therefore I have sailed the seas and come
 To the holy city of Byzantium.⁽³⁶⁾

ビザンチウムはイエイツにとっては精神と肉体が共に永遠の存在を賞でることのできる国である。浄化の火によって焼かれて“the artifice of eternity”となって肉体は永遠性を得るのである。生ある人間の必定の運命である老衰をイエイツは肯定することができない。老いて、醜く、古びたかかしの様にこの世にしがみついているこの肉体は、永遠に美を追求する詩人にとっては、やっかいな重荷以外の何物でもない。幼な児を膝に抱く若い母は、もしその児の上に60年の齢を見るならば、己れの膝に遊ぶ児は、決して苦しみとの代償とはなり得ないであろう、というイエイツの言葉は、彼の人生に対する感慨をよく示すものである。

Once out of nature I shall never take
 My bodily form from any natural thing,
 But such a form as Grecian goldsmiths make
 Of hammered gold and gold enamelling
 To keep a drowsy Emperor awake;⁽³⁷⁾

再び生れ変わったときには、決して生あるものとはならず、あのギリシヤの匠達が作り出した金銀の細工物になりたいとイエイツは希う。生あるがために滅びなければならないのであれば、生なきが故に永遠の存在をほこることのできるように見える「物」に化したい。ビザンチウムは、イエイツの新しいティール・ナ・ヌォーグとなったのである。

“*The Tower period*” に於ては、イエイツの老いの身に対する悲しみは怒りとなり、通じ合うことの困難な周囲に対するもどかしさは反撥の念となって、こうしたすべてから抜け出そうとする試みが、ビザンチウムを憧れさせ、船出させることになった。イエイツの身うちには、まだ己れの足で歩むことのできる人間の力と若さがあった。イエイツの活動は、まだ外に向っていた。関心事は自己の内部にあるよりは、はるかに多く自己の外部にあった。そうした時期に、憧れの対象もまた、内なる世界にあるのではなく、自己の外、遙かなところに見出されるのは当然であった。“*Sailing to Byzantium*” は、まだ若さの残っているイエイツの心情の表現であると見られることもできるだろう。

I choose upstanding men
 That climb the streams until
 The fountain leap, and at dawn
 Drop their cast at the side
 Of dripping stone ; I declare
 They shall inherit my pride,
 The pride of people that were
 Bound neither to Cause nor to State,⁽³⁸⁾

己れの精神を継ぐべき高邁な心情を探し求め、国の中に理想郷を作り上げようと努力しながら果し得ぬ詩人は、自らを嘲りながら、‘*Monument*

of unaging intellect⁽³⁹⁾”をないがしろにする祖国を離れたのであった。

[V]

塔をさらに高く、めぐれる階を登りながらイエイツが探し求めて行ったのは、*The Tower* に於けるよりも、もっと卒直に人間の生、存在の真実にせまろうとする途であった。これまでの外向的な理想の追求は、*The Winding Stair and Other Poems* に至って、自己の内にひろがる世界に向かおうとする。

1927年から28年にかけてイエイツの健康は急速に衰えた。彼は保養のために明るい地中海の太陽を追いかけて行かねばならなかった。1928年の夏になって元老院の会期が終ったことは、イエイツが公的な生活から身を退くのによいきけっかを与えてくれた。1929年6月、イエイツは元老院で最後の演説をした。イエイツ一家がバリリイで過したのも、この夏が最後であった。バリリイの古塔は衰えた健康には不適當な場所であった。秋になってイエイツはマルタ風邪のために再び病床に伏した。このときは、死と真向から対決せねばならぬところまで行った。健康についての自信の揺らぎと、社会的、公的な生活から身を退いたイエイツのこの時期の作品は、1929年に、ファウンテン・プレスから限定版として出され、1933年には、マクミラン社から *The Winding Stair and Other Poems* として出版された詩集に代表されるものである。この詩集では *The Tower* に於けるよりもより広い内的な世界の展開がある。即ち、対立するものとして捉えられていた諸相は禅学的な思想の影響によって、一切をあるがままの姿で受け入れようとする努力によって、より広い、大きな世界の中へ導き入れられている。“Sailing to Byzantium”にうたわれる、精神と肉体の対立、知性と情緒の対立、有限と無限の対立は、それぞれが対立するものとして受け入れられながら、共にその意義を全うする。“Among School Children”の中にある、

Labour is blossoming or dancing where

The body is not bruised to pleasure soul,⁽⁴⁰⁾

や, “Sailing to Byzantium” にうたわれるところ, あるいは “Leda and the Swan” にうたわれる歴史的考察の意味するところは, “A Dialogue of Self and Soul” に至ってもっと明解になってくる。これ等の詩の中に求められているものは, 生と死, 無限と有限, 霊と肉の対立, 相剋のうちにおける実相の掌握である。一方を実相とするなら, 他方は仮象にすぎなくなるであろう。“Leda and the Swan” では, こうした追求の試みは, イエイツの歴史観の表明ともなっている。人間であるレダへの白鳥の訪れ, そのあとでレダにはどのような変化が生じるのであろうか。歴史的な, あるいは文化的な交りのうちに与えられるものは何であらうか。

Did she put on his knowledge with his power

Before the indifferent beak could let her drop!⁽⁴¹⁾

力と智は共にレダに与えられない。肉と霊は, 対立しあう。

My Soul. I summon to the winding ancient stair;

Set all your mind upon the steep ascent,

Upon the broken, crumbling battlement,

Upon the breathless starlit air,

Upon the star that marks the hidden pole;

Fix every wandering thought upon

That quarter where all thought is done;

Who can distinguish darkness from the soul!⁽⁴²⁾

霊は自己の内にある目に見えぬ部分である。ちょうどそれは、我々の目を暗くする闇ににている。闇が光をおおいつくすように、霊もまた、目に見える肉を統べる。霊は天上界を志向し、はるかな塔の高みへと、“Winding Stair”を登り行こうとする。塔の頂には、永遠の智へと霊を導びくほの暗い星空が広がっている。目に見えぬ霊が天上界を志向するとき、目に見える部分である肉体は、この世につなぎとめられることを希求する。

My Self. The consecrated blade upon my knees
 Is Sato's ancient blade, still as it was,
 Still razor-keen, still like a looking-glass
 Unspotted by the centuries;
 That flowering, silken, old embroidery, torn
 From some court-lady's dress and round
 The wooden scabbard bound and wound,
 Can, tattered, still protect, faded adorn.⁽⁴³⁾

膝の上の“Sato's ancient blade”は、地上につなぎ留められる“物”のシンボルであり、目に見える肉体のシンボルでもある。それは幾世紀を経て未だに作られた時の美しさと輝きを保ち、それを包む絹布もまた、破れ、ほつれてはいるが、美しさを保ちつつ、刀を保護している。刀にも絹布にも、物の永遠性がある。肉体は霊に対し、刀は塔に対し、昼光は夜の闇に対する。イエイツは“A Dialogue of Self and Soul”の中で、こうした対立のうちに実相と仮象を見分けようとするのではない。彼は、それぞれの存在、それぞれの相のうちにある真理を見極めようとするだけである。

.....—and all these I set
 For emblems of the day against the tower

Emblematical of the night,
And claim as by a soldier's right
A charter to commit the crime once more.⁽⁴⁴⁾

肉体を代表するものである“*My Self*”は、軍人がその権利として刀をふるうことを要求する如く罪劫を犯す権利を要求する、という。生きそして死ぬことは、肉体を持つものの罪劫である。“*My Self*”はあえてそれを要求する。もはや、罪劫から解放されようと、身をもがくことはしない。

*My Self. A living man is blind and drinks his drop,
What matter if the ditches are impure!
What matter if I live it all once more!⁽⁴⁵⁾*

生きている人間は、己れの血滴を飲んでいることさえ知らぬ程に無知である。この地上につなぎ留められて、そのまわりを見ることすらできない。それでもなお、それが人生であるなら、よろこんで生きて行こうという。

I am content to live it all again
And yet again, if it be life to pitch
Into the frog-spawn of blind man's ditch,
A blind man battering blind men;
Or into that most fecund ditch of all,⁽⁴⁶⁾

イエイツは人間存在の三つの相を肯定する。二つはそれぞれ互いの上に立つものでもなく、また隷属させられるべきものでもない。霊は永遠の生、永遠の智を志向する。イエイツは首を縦にふる。霊は永遠の智を求めて、この重い肉体をまで運び上げようと努力する。あのほのぐらゐ塔の頂には

すべてを悟らせてくれる理智への広がりがる。しかし肉体の代表である自我はこの地上に足をふまえている。目は地上にそそがれている。イエイツはこれに対しても首を縦にふる。人生は、それがどのように惨めなものであり、汚れたものであっても生きるだけの価値があるのだとイエイツは考える。人間の生の証明がここにあるのではないか。元重の刀は元重が生きていたということの証しではないか。人生をあるがままに見ようとするとき、そのすべてを肯定しようとするとき、イエイツの身うちにはよろこびがある。

Though the great song return no more

There's keen delight in what we have :

The rattle of pebbles on the shore

(47)

Under the receding wave.

二つの対立する相のうち一如なる世界を見出そうとする努力は “A Dialogue of Self and Soul” ばかりでなく、*The Winding Stair and Other Poems* の中の他の詩の中にも見出されるものである。例えば “Vacillation” の中では：

The Soul. Seek out reality, leave things that seem.

The Heart. What, be a singer born and lack a theme ?

The Soul. Isaiah's coal, what more can man desire ?

The Heart. Struck dumb in the simplicity of fire !

The Soul. Look on that fire, salvation walks within.

The Heart. What theme had Homer but original sin ?

(48)

そしてまた “A Dialogue……” の原型ともいうべき “Symbols” では

A Storm-Beaten old watch tower,
A blind harmit rings the hour.
All destroying sword blade still
Carried by the wandering fool.
Golden-sewn silk on the sword blade,
Beauty and fool together laid.⁽⁴⁹⁾

こうして、イエイツの人間存在の意義の認識は *The Winding Stair and Other Poems* に至ってさらに深まらて行き、彼の内面の広がりはいよいよ大きくなって行ったのであったが、こうした認識への到達に鍵を与えてくれたのは1920年3月の一夜ポートランドで贈られた刀であった。塔はイエイツに憧れと、永遠の智への到達の鍵を与えてくれた。元重の刀はイエイツの内なる部分を地上につなぎ留め、それによって全人格としての人間認識の目を開いてくれたのであった。イエイツの外に向った活動が静かに終りに近づいたとき、内なる世界は自づからこれまでにない程の広さと大きさを示してくれたのであった。

(1) Norman Geffares, *W. B. Yeats: Man and Poet* (Routledge & Kegan Paul), p. 215

(2) 佐藤醇造(1896～) 1920年3月には農商務省実業練習生としてポートランド滞在中であった。

(3) 『英語青年』1968年9月号, p. 611に W. B. Yeats の子息, Michael Yeats 氏の佐藤醇造氏にあてた手紙の紹介がある。この手紙の中で Michael Yeats 氏はつぎのように述べている。

“We have of course many things in our honse that I inherited from my father, William Butler Yeats, but our most treasured possession is the

beautiful Motoshige sword that you so generously gave to him on that night in Portland, almost fifty years ago.

The sword lies in a place of honour in the drawingroom of our house. It forms a perpetual reminder to us, not merely of your generosity, but also of the six hundred years'-long tradition that it represents. It lies, of course, in the embroidered cloth in which you wrapped it when you presented it to my father and I am happy to say the blade of the sword seems as clear and highly polished as it was when I first saw it.

- (4) Norman Geffares, *W. B. Yeats: Man and Poet*, p. 226
- (5) *The Collected Poems of W. B. Yeats* (以下 *C. P.* と略), p. p. 265~267
- (6) T. S. Eliot, "Yeats," *Yeats; A Collection of Critical Essays*, ed. by John Unterecker, p. 54
- (7) *Ibid.* p. 56
- (8) *Ibid.* p. 57
- (9) *C. P.*, p. 180
- (10) *C. P.*, p. 183
- (11) *C. P.*, p. 212
- (12) *C. P.*, p. 270
- (13) *C. P.*, p. 275
- (14) *C. P.*, p. 124
- (15) Norman Geffares, *W. B. Yeats: Man and Poet*, p. p. 216~217
- (16) *C. P.*, p. 220
- (17) Norman Geffares, *W. B. Yeats; Man and Poet*,
- (18) G. S. フレイザー著, 増谷外世嗣訳, 『イエイツ』, p. 20
- (19) *C. P.*, p. 212
- (20) *C. P.*, p. 238
- (21) *C. P.*, p. 231
- (22) *C. P.*, p. 231
- (23) *C. P.*, p. 230
- (24) *C. P.*, p. 233
- (25) *C. P.*, p. 44

- (26) G. S. フレイザー著、増谷外世嗣訳、『イエイツ』, p. 24
- (27) *C. P.*, p. 237
- (28) *C. P.*, p. 236
- (29) *C. P.*, p. 243
- (30) *C. P.*, p. 243
- (31) *C. P.*, p. p. 244~245
- (32) エドモンド、ウイルスン、大貫三郎訳、『アクセルの城』, p. p. 91~94
- (33) *C. P.*, p. 276
- (34) アイルランド伝説には、ティール・ナ・ヌオーグ (Tir na n-Og) という国があって、そこでは死もなく、魂や肉体の美も亡びることはない。この国の住者達はシイ (Sidhe) と呼ばれる妖精達であり、この世に住む人間は、どこからともなく現われた愛らしい少女からりんごの花の枝を差し向けられると、その人間はこの世がわずらしくなり、やがて、ティール・ナ・ヌオーグという人の目に見えぬ国に入ってしまう。1個のりんごを食べると、その人は百年の命を延べることができるといふ。
- 尾島庄太郎著、『現代アイルランド文学研究』, p. p. 55~80
- (35) *C. P.*, p. 217
- (36) *C. P.*, p. 217
- (37) *C. P.*, p. 218
- (38) *C. P.*, p. 222
- (39) *C. P.*, p. 217
- (40) *C. P.*, p. 243
- (41) *C. P.*, p. 241
- (42) *C. P.*, p. 265
- (43) *C. P.*, p. 265
- (44) *C. P.*, p. 266
- (45) *C. P.*, p. 266
- (46) *C. P.*, p. 267
- (47) *C. P.*, p. 271
- (48) *C. P.*, p. 285
- (49) *C. P.*, p. 270